山崎郷土研究会報

No. 77

3. 4. 25

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話 62－2000

近世初頭の山崎藩（三十五）

島田　清

二、池田輝澄時代（三十四）

○池田光政の忠言（続2）

㈥、池田光政の忠言

池田光政は、江戸時代前期の名君、賢侯として名高い。

光政は、幼少のときから、物事を見抜く力をもっていた。これは、遺伝的要素に基づくと思われるもので、母の榊原氏からうけたのであろう。榊原氏の父は、徳川四天王の一人、榊原康政で、そのすぐれた素質をうけついだと思われる。もちろん、光政の父利隆は、輝政の嫡孫である。父方の祖父が池田輝政、母方の祖父が榊原康政、この両英傑の血をうけた光政が、非凡な天稟をもっていたことは、また、当然のことといってよかろう。

光政は、こうした天性に加えて、賢母の誉れ高い榊原氏の膝下で保育され、さらに、古田栄寿尼・下方（しもかた）覚兵衛のすぐれた輔導をうけた。こうした理想的な育成が、天性にいっそうの磨きをかけたことはいうまでもない。

光政は、元旦の書き初めに、「儒道興隆、天下泰平」の八文字をしばしば書いた。自ら儒学を修めるとともに、領内の士庶にま

目次

① 近世初頭の山崎藩（三十五）……島田　清……1
② 上町村宗門改帳……久保寅夫……3
③ 河原山延ヶ滝の伝説……矢野寅之助……17
④ 金屋村鋳物師長谷川氏の研究　片山昭悟……19
⑤ 秋の旅行記……志水美好……21
⑥ 北川邸の梅（花香実）……堀口春夫……23
⑦ 近況ニュース……24
⑧ 平成三・四年度役員……25
⑨ 事務局だより……27

でこれを及ぼし、いわゆる封建教学を樹立した光政が、その中心思想である〝仁政〟を施し、それによって天下の安泰をはかろうとしたことを端的に示したことばである。光政が、寛永九年（一六三二）に岡山藩主となってから、寛文十二年（一六七二）に致仕するまでの四十年間と、隠退後、西ノ丸にあって政務に関与し、天和二年（一六八二）五月、七十四歳で逝去するまでの十年間を併せた五十年、すなわち半世紀の長期にわたり、岡山藩政を刷新したことはまことにすばらしく、その業績は特筆されてよい。農政・土木・教学のどの分野についてみても、仁君としての面目が躍如としている。

光政は、輝澄より六歳年下である。しかし、こうした人間的成長の目から見て、発病した寛永十年以後の輝澄には、内心、憂慮すべきものを感じていたのではなかろうか。殊に、側近の寵臣、菅友伯の跳梁は目にあまるものがあり、江戸家老小河四郎右衛門を筆頭とする新参組と、国家老伊木伊織を頭に置く古参組との反目、闘争を助長する言動に、大きな危惧を感じていたにちがいない。

既述したごとく、寛永十六年七月に起こった新参六百石の旗奉行、別所六左衛門妻女貸銀の出入騒動は、関係ある十一人の組頭のはからいによって、いったん、納まっていた。ところが、これに不満を抱いた別所が、同じ新参組の頭、小河四郎右衛門に訴え、小河が十一人の組頭を呼んで、

〝少し、別所の方にも勝をつけて、彼らが憤らないようにしてほしい。〟

と申し入れたことによって、事件が再燃した。物頭たちは、

〝喧嘩は理非でなく、双方同罪であるのが大法だ。〟

といって譲らない。これを見た伊木伊織が、小河四郎右衛門と十一人の組頭の間を言いなだめ、これを事済みとした。

ところが、江戸藩邸に居て、このことを知った菅友伯が、

〝十一人の取り扱いは甚だ不埒だ。別所は、さぞ、不快に思っているであろう。

伊織のはからいもよろしくない。と、八月上旬に書状を物頭たちに送った。事件は、これによって再々燃することとなったのである。

十一人の物頭たちは、もちろん立腹した。そして、伊木伊織に相談した。菅・別所も、小河四郎右衛門のもとに集って対抗策を協議した。新旧家臣団の確執は、ここに、大きくエスカレートすることとなったのである。

ふりかえってみると、もともと、足軽組の内で

最新型カラー現像機導入
カラープリント・スピード仕上げ
兵庫県市町村職員共済組合指定店
良い品を・安く・安心して買える店
Specialty Camera Shop
コーエーカメラ
宍粟郡山崎町東鹿沢26－3 ☎62－2089

起こった些細な出来事である。しかも、一度ならず、二度までも、関係者の間で協議し、納めたものである。これをなぜ、再々燃させたのか。

事件の根底に、新旧家臣団の対立があることは、誰でも知っていよう。しかし、これを抑え、円満に納めるよう努力するのが行政の常道である。一度目の決着も、二度目の決着も、そうしたことによってついた。ところが、これを進んで破り、対立・抗争を助長する方向に、ことを運ぼうとする者が居てはたまったものではない。しかも、それが藩主の側近者であり、寵愛をうけている者というに至っては、藩内の安泰はあり得ない。菅友伯は、まさに、その〝目〟にあまるものであり、これを押さえるのは絶対的な権力をもつ藩主しかいない。この藩主に、その〝明〟がなく、いたずらにその跳梁を許していては、藩政の崩壊を見るのは当然である。光政の目には、これが、はっきりと見えていた。池田家の宗家を継ぐ光政は、遂に、輝澄に対する忠言の使者を送った。寛永十六年秋のことで、使者に選ばれたのは、牧野能登守である。

能登守が輝澄に面謁し、光政の忠言として申し述べたことは、三つの柱からできている。第一は、菅友伯に関することで、友伯に暇をやるか、此方（光政の手もと）に預かるか、どちらかの処置を行うこと。第二は、小河四郎右衛門のことで、武功もある人間だから要職を許すこと。第三は、伊木伊織のことで、今までどおりに勤めさせること。であった。このうち、重要なのは、いうまでもなく第一の項である。第二と第三の項は、従来の形をそのままにして置くというのであるから、特別に、どうということはない。しかし、第一の項は、まことに思いきった申入れであり、〝がん細胞〟を一挙にくり抜こうとしたものである。さすがに、光政だ、の感を深くする。友伯に暇を出せば藩に関係することはない。しかし、そうした荒療法が人目をひくなら、自己の手許に預かろうと申出た。手許に預る、というのは、「預かり者」として光政監視の下に、岡山へ引取ることで、山崎藩士の籍は残っていても、藩内の政治に関与することは出来ない。光政は、これによって藩内の危機を一挙に、除去しようとしたのである。

上町村宗門改帳（二）

久保寅夫

紹介しています尼ヶ崎領上町村伊和組の宗門御改帳は、久保家に現存する二冊の内の一冊文久三亥年（一八六三年）の分です。第七十六号に真言宗人家御改帳を載せました。

今回は、一向宗人家御改帳を紹介します。

文久三亥年　三冊之内二番
尼ヶ崎領
一向宗人家御改帳
伊和組
三月　上町村

一向宗山崎町
一光泉寺　特高三斗　年三十九
清次郎㊞
同寺　年三十三
女房　み　き
同寺　年五ツ
男子　徳　蔵
同寺　年二ツ
生子　婦　さ
家内〆四人内　男二人　女二人
右之者年十一娘屋す当村萬右衛門株訳二而真言宗帳並加へ申候
一光泉寺　無高　清次郎娘年十一屋す
萬右衛門相続人
此度徳王寺旦那にて御届申候
家　内　一人女
一向宗須賀村
一願寿寺　持高拾三石五斗　年五十六
吟　蔵㊞
同寺　年四十三

健康づくりの相談が気軽にできる店
ごこう薬局
薬剤師　岸本八重子
岸本弘子
山崎町東和通り・☎(0790)62-1190

同寺　女房　はま　年三十
同寺　男子　八十治　年十九
同寺　女子　里　津　年十二
同寺　男子　庄右衛門　年十
同寺　女子　とよ　年五ツ
同寺　男子　与三郎　年二ツ
同寺　生子　重右衛門
家内ゞ八人内　男五人　女三人
一願寿寺
持高八石五斗　年四十七
忠兵衛㊞　年三十八
女房　すみ　年廿一
養子　はるゑ　年十六

同寺　女子　里ゑ　年五ツ
男子　善吉
家内ゞ五人内　男二人　女三人
一願寿寺
持高壱斗　年五十二
婦　き㊞　年廿七

悴　亀吉
年廿二
女房　婦さ
年二ツ
生子　い志
男一人
女三人
家内〆四人
一願寿寺
無高
年六十一

食品の店
いまや
さつき通り4丁目
TEL ⑥2 0169

同寺

そて㊞
家内〆壱人女
一光泉寺
持高壱斗五升
年三十五
伴　治㊞
年三十二
女房　とみ
年十三
女子　志の
男壱人
女弐人
家内〆三人内
同寺
同寺

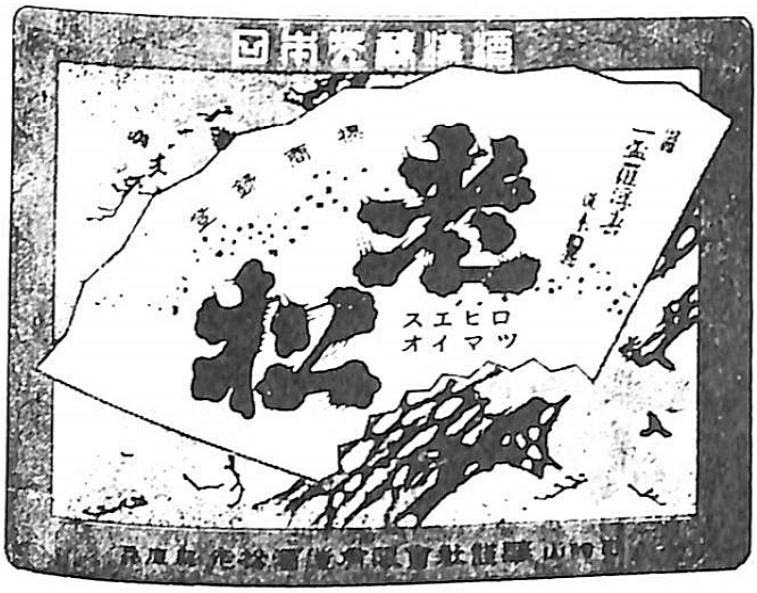
一光泉寺
持高六石弐斗
年五十二
治右衛門組　重　蔵㊞
一向宗御名村
西光寺
年三十九
女房　すみ
年五ツ
光泉寺
男子　嘉　蔵
男弐人
女壱人
家内〆三人内

一願寿寺
持高三斗
年五十三
豊蔵組　里　な
年廿六
同寺
男子　富　蔵
年廿
女子　ち　ゑ
家内〆三人内
男壱人
女弐人

一願寿寺
無高
年四十二
喜代蔵組　福　蔵㊞
同寺
年三十六
妹　は　る
家内〆弐人内
男壱人
女壱人
一願寿寺
持高三斗一升
年廿三
志ゆん㊞
同寺
年三十三

養子　平　蔵
年廿六
同寺
女房　い　そ
家内〆三人内
男壱人
女弐人
一願寿寺
持高四斗五升
年四十五
佐右衛門㊞

同寺　年三十二
同寺　女房　志　う
同寺　年十弐
同寺　男子　喜　蔵
同寺　年三ツ
同寺　同所　太　作
同寺　年五十二
養母　そ　の



家内〆五人内　男三人
女弐人
一西光寺
持高五石五斗
年七十
源右衛門㊞
同寺　年三十
民　蔵
同寺　他領当郡上ノ村
源次郎方より不縁申候　ゆり
家内〆三人内　男弐人
女壱人
右之外
女房年六十七そて儀去十一月病死仕西光寺葬申候
一西光寺
持高九石三斗
年三十六
健　蔵㊞
同寺　年廿九
女房　てる
同寺　御領分清野村松太郎
兄姉智二来ル継兄
年四十七

文太郎事
米　蔵
年三十七
女房　き　ぬ
同寺
年六ツ
健蔵女子屋　さ
同寺
年四ツ
同人男子　嘉左衛門㊞
男三人
女三人
家内〆六人内
一西光寺
持高壱斗三升
年七十五
な　津㊞
家内〆壱人女
一西光寺
持高三石三斗
年六十六
き　ぬ㊞
家内〆壱人女
一西光寺
持高壱石斗三升
年五十六

長　蔵㊞
年十八
悴　平左衛門
同寺
家内〆弐人男
一西光寺
持高弐石五斗
年五十二
伊三郎㊞
家内〆壱人男

創業嘉永元年　きものと共に130余年
高級呉服の専門店
とくさや
山崎町本町（さつき通）
☎(0790)62-1680代

一願寿寺
持高九石弐斗
年六十一
忠蔵㊞
同寺
年六十一
女房よせ
同寺
年四十
悴重蔵
同寺
年八ツ

外科・内科
山中医院
院長 山中陽一
山崎町西町・TEL⑥②0036

同所 太作
男三人
女壱人
家内〆四人内
一願寿寺
持高七石三斗
年五十九
平七㊞
同寺
年廿九
悴時蔵
同寺
年廿五
女房婦じ
同寺
年五ツ
男子作太郎
同寺
年四ツ
同所 卯作
男四人
女壱人
家内〆五人内
右之外
平七娘廿五この儀去五月病死仕願寿寺葬申候
一願寿寺
持高壱石五斗
年三十六
かの組 重右衛門㊞

同寺　年廿二
女房　な　お
同寺　年二ツ
生子　よ　こ
家内〆三人内　男壱人
女弐人
一願寿寺
持高拾五石五斗
年六十九
周　蔵㊞
同寺　年五十二
女房　ひ　さ
同寺　年三十六
悴　儀兵衛
同寺　年十二
女子　里　う
同寺　年九ツ
男子　儀右衛門
同寺　年四ツ
同所　伊右衛門
家内〆六人内　男四人
女弐人　牛壱疋
右之外

儀兵衛女房年三十二志て儀夫八月病死仕願寿寺葬申候
一願寿寺
持高八石五斗
年六十一
源左衛門㊞
同寺　年廿六
養子　佐左衛門
同寺　年廿六
女房　具　に
同寺　年五ツ
男子　佐太郎
同寺　年三ツ
同所　藤兵衛
家内〆五人内　男四人
女壱人
一願寿寺
持高五斗
年四十三
粂蔵組　み　せ㊞
同寺　年十六
男子　利右衛門
同寺　年廿三

他領当郡下町太左ヱ門　里賀
娘当年縁付来　養子
家内〆三人内　男壱人　外に来年壱人
女弐人　入ル事
一願寿寺
持高壱年八升
年六十六
五郎左衛門㊞
同寺
年七十一
女房　志ゆん
同寺
年四十六
悴　丑　蔵
男弐人
家内〆三人内
女壱人
一西光寺
持高弐斗五升
年廿五
もせ組　ひ　め㊞
家内〆壱人女
一願寿寺
持高六石五斗
年四十九
孫三右衛門㊞

同寺
年三十
悴　与　蔵
同寺
年廿九
女房　み　え
同寺
年六ツ
女子　志　を
同寺
年廿六
孫三右衛門
悴　伊　蔵
家内〆五人内
男三人
女弐人
一願寿寺
持高弐斗
年五十一
岩　蔵㊞
同寺
年五十二
女房　具　に
同寺
年十九
悴　勘　蔵
同寺
年五ツ
同所　良　蔵
家内〆四人内
男三人
女壱人

一西光寺
持高拾壱石弐斗
年五十
露　蔵㊞
同寺　年四十
女房　い　そ
同寺　年廿
娘　む　め
同寺　年七十
悴　従　蔵
同寺　年十四
他領当村上牧谷村安兵衛
娘当年来養子　て　い
同寺　年二ツ
生子　加　津
家内〆六人内　男弐人
女四人
一西光寺
持高拾三石八斗
年七十二
勝左衛門㊞
同寺　年六十六
女房　き　せ

同寺　年三十
米蔵　女房　い　せ
同寺　年四ツ
女子　と　み
同寺　年廿九
勝左衛門　悴　慶　蔵
同寺　年廿
同所　久　松
同寺　年七十三
養母　み　よ
家内〆七人内　男三人
女四人　牛壱疋
右之外
悴年三十五米蔵儀去十月病死仕西光寺葬申候
一願寿寺
持高拾石弐斗
年四十
元　蔵㊞
同寺　年三十六
女房　て　い
同寺　年十一
娘　里　よ
同寺　年五ツ

男子　治　作
男弐人
女弐人
家内〆四人内
一願寿寺
持高拾壱石弐斗
年五十四
久　七㊞
同寺
年五十
女房　志　津
年廿五
同寺
養子　善右衛門
男　男弐人
女壱人
家内〆三人内
一願寿寺
持高壱石五斗
年五十一
惣右衛門㊞
同寺
年四十
女房　と　せ
年廿
同寺
女子　な　を
年十六
同寺
同所　八　重

同寺
年十五
男子　伊　作
同寺
年十二
女子　き　く
同寺
年七ツ
男子　和原次
同寺
年五ツ
女子　津　類
家内〆八人内
男三人
女五人
一西光寺
持高壱斗弐升
年廿五
市太郎組　新兵衛㊞
同寺
年十九
妹　き　く
同寺
年十六
同所　と　き
同寺
年五十七
母　志　す
家内〆四人内
男壱人
女三人

右之外
父年五十六市太郎儀去十月病死仕西光寺葬申候
右之外
祖母年七十六はや儀去五月病死付西光寺葬申候
一願寿寺
持高五斗三升
年廿四
忠助組治兵衛㊞
同寺
年廿四
女房　と　輪
同寺
年五八
母　ゆ　多
家内〆三人内
男壱人
女弐人
右之外
父年五十七忠助儀去四月病死仕願寿寺葬申候
一願寿寺道場
年四十九
唯称房
同寺
年四十一
女房　志　ん
年七ッ
同寺
女子　い　と

同寺
年四ッ
同断　千代野
男壱人
女三人
家内〆四人内
家数合三拾五軒
去戌御改同断
内壱軒　道場
人数合百三拾三人内
男六拾七人
女六拾六人
牛三疋
内壱人出家
文久三亥年三月
奥文言真言宗同様可認事
一向宗播州飾西郡象山本徳寺末寺
同州完粟郡山崎町
光泉寺
右同宗同寺末寺
同州同郡須賀村
願寿寺
右同宗京都西本願末寺
同州同郡御名村
西光寺
中嶋松治　殿
吉原佐賀八殿
奥文言真言宗同様也

宍粟郡伊和組
上町村年寄吉右ヱ門
庄屋藤兵衛

文久三亥年三月
中嶋松治様様
吉原佐賀八様
奥文言真言宗同様也

大庄屋伊和組
土居良左衛門

文久三亥年三月
中嶋松治様様
吉原佐賀八様

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします
神姫観光
〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
（神姫バス山崎待合所内）
TEL (0790) 62−7588
FAX (0790) 62−7589

河原山延ケ滝伝説

矢野　寅之助

蔦沢地区の上ノ下部落にある、河原山川の上流に延ケ滝（信ケ滝）と言いなかなか見事な滝があります。四十年程前までは、もっと素晴しい姿でしたが、今の県道ができたその工事で埋まり以前に比べると少し淋しい滝になりました。

この滝がなぜ延ケ滝と言はれるようになったかそれには、こんな悲しい話しが都多の里には昔より伝わっています。

それは今から、何百年も前のことでしょう。この川の滝より五百米位上流のそばに野々隅と言う平地があります。（現在の大国牧場です）ここに昔一つの集落があったそうです。（砂金を取る人が住んでいた。又木地屋を職とする人が住んでいたと二つの説がありますが私は木地屋説をとります）

この村に一人の若者がいました。（名前は伝わっておりません）若者は母親と二人で暮していました。この若者がある時、友達と室の明神様にお参りし、その時室の遊女町で、おのぶと言う若い遊女と知り合いました。おのぶはまだ若く気のやさしい、おとないし女でした。二人はすっかり好きになり、おのぶはつとめの年期があき自由の身になったら夫婦になろうと固い約束をしました。そして若者は野々隅に帰りましたが、おとなしい若者はおのぶの事をはずかしくて、母親に話すことが出来ませんでした。それがこの悲劇の起る原因になりました。

やっと長いつとめの年期があいておのぶは自由の身になりました。若者との約束を信じていたおのぶは恋しい若者を尋ねて、はるばる野々隅の里に向いました。今とちがって女の足でそれはつらい旅だったでしょう。尋ねたずねて、都多の里に入り、そして険しい河原山の山道を登りました。それはそれは恐ろしい事だったでしょう。おのぶはようやく若者の家の前まで来ました。それはすでに日も大分かたむきかかっていた時だったのです。

そしておのぶは若者の家に入り案内を乞いましたところが不幸にも若者は留守でした。もし若者が居たならばおのぶの運命も変っていたでしょうが、家には母親が一人留守をしていました。

おのぶは母親に若者との約束を話しました。聞いた母親はびっくりしました。そのはずです母親は何も聞いていなかったのですから、そうして大変困りました。当時遊女あがりの女を家の嫁にするなんて考えられないことだったのです。苦しまぎれに母親はつらい嘘を言いました。それは最近、近所の人が死んだことから思いついた嘘だったのです。

母親は言いました（おのぶさんやらあなたが訪ねて来てくれた息子は可愛想に死にました）びっくりしたおのぶを連れて母親は新しい一つの墓に案内しました。（それは最近亡くなった近所の人の墓でした）しかし字の読めないおのぶにはそれが嘘とは分るはずがありません。ただ泣いて身の不幸をなげくのみ、そうして泣きなき母親に別れを告げて山を下りました。すでに日の暮れに

近い頃だったようです。白い足に赤い鼻緒の草履がひときは哀れであったそうです。それが生きたおのぶの最後の姿であったとか……

あくる日村人は下流の滝の中に若い女の死体が浮んでいるのを見つけました。それは哀しいほど美しいおのぶでした。そして滝より少し上流の深い淵のそばの木の枝に赤い鼻緒の草履が片足ひっかかっているのが見つかりました。過ってその淵に落ち込んだのか、又は世をはかなんだおのぶが自から身を投げたのか、それはおのぶ自身より知る由もありません。

それから何時とはなしに、おのぶの浮んだ滝をお延の滝と言い、後には延ケ滝と言われるようになったそうです。そして又おのぶが落ちたと思われる淵を女郎淵と言われ（遊女のことを女郎と言う）たのです。女郎淵は今でも青々とした水をたたえています。延ケ滝は今尚昔ながら飛沫きをちらしています。

一度河原山をさかのぼり青葉紅葉をさぐりながら哀れな女、おのぶの面影などしのばれるのも夢の少ない今日この頃よきロマンではないでしようか。

これは平成元年八月同氏が『蔦沢の伝説と民話集』として発刊されたものの中から掲載させていただきました。

延ケ滝

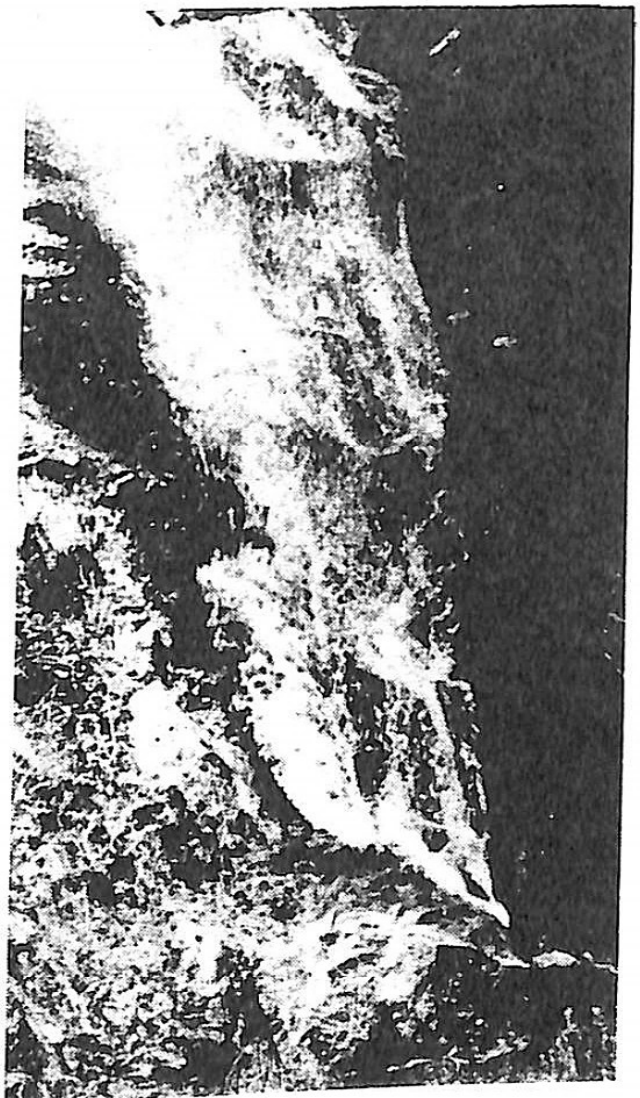


写真 天地滝

宍粟郡金屋村
鋳物師長谷川氏の研究

片山昭悟

一、はじめに

播磨の鋳物師の研究については、坪井良平氏が、昭和三十九年の兵庫史学第三七号に「徳川期における播・但両国の鋳物師」―主として直島製煉所の資料による―を発表されています。

その資料の中に、宍粟郡金屋村の長谷川氏が記載されています。

今回、直島製煉所の資料の内容について紹介し、長谷川氏の製作した梵鐘について紹介します。

二、直島製煉所の資料について

直島製煉所の資料の中に、太平洋戦争のとき多数の梵鐘等が各地より供出されています。

昭和二十一年には、岡山県直島の三菱鉱業株式会社直島製煉所に多数の供出鐘が存在していることが、坪井清足氏の調査で確認されています。

供出鐘は、鳥取・岡山・大阪・兵庫・和歌山・滋賀・京都・奈良の八府県のものが八〇二五口あり、総重量が二五〇二トン、その中で残存していたものは、三〇九口であります。

供出先の寺院名、紀年銘、鋳物師を調査されていたものが八〇二五口のうち四九五口であります。

その中で兵庫県下のもので一二〇口の梵鐘が調査され、その年代と鋳工名がわかっています。

兵庫県内のものは、姫路から西部のものと但馬の大部分のものであります。

播磨のものは、飾東郡姫路野里、佐用郡三ケ月、多可郡茂利、赤穂郡高田中野村、佐用郡平福、宍粟郡金屋村の六ケ所であります。

宍粟郡金屋村長谷川氏の直島の資料には、長谷川五郎兵衛が造した三口の梵鐘があります。

鐘銘は次のとおり。

(1) 美作勝田郡勝間田町　正行寺鐘
明治十二巳卯五月十三日（一八七九）
播州宍粟山崎住鋳工　長谷川五郎兵衛

(2) 揖保郡越部村仙正　心光寺鐘
明治十三年十一月（一八八〇）於当村鋳造
鋳工　播磨国宍粟郡住　長谷川五郎兵衛

(3) 美作英田郡江見村川北　本教寺鐘
明治四十三年三月（一九一〇）於当村内鋳造
鋳工播州宍粟郡住　長谷川五郎兵衛

この三口の梵鐘は、揖保郡越部村で一口と美作の勝田郡勝間田町と英田郡江見村の二口であります。

いずれも明治十二年（一八七九）から明治四十三年（一九一〇）に鋳造しています。鐘銘から揖保郡越部村心光寺の梵鐘と美作英

が、見晴らしはきかずさっぱりだった。那智山は熊野詣の聖地であり千古斧を入れないうっそうとした大森林である。バスを降りるとそこから那智大社までは四六七段の急な石段が続いている。石段の高いのに驚いて登るのをあきらめた方も何人かあった。雨あがりで足下はわるいしやむを得ないことだった。

ようやく社前にたどりつき社務所へ伺うと、正式参拝の準備をして待っていて下さった。閏賀の大谷神主さんが以前このお社に勤務されていたので、案内を頼んでもらっていたためである。堀口会長以下全員そろって恭々しく拝礼をすませる。一般の方は入れないのに特別に本殿前へ案内して頂く。神官から熊野大社の由来を詳しく説明して頂いた。写真で見るだけであった権現造りの朱塗りの社殿が五つ整然と並んでいる。その壮厳さにうたれながらカメラに収めて神前を辞した。

次いで、神社の隣にある青岸渡寺へ詣る。ここは西国一番の札所である。朱印を頂いておりる。天気がよければ三重塔から滝が眺められて絶景なのだが今日はあきらめるしかない。それに、社務所へお礼に寄ったりして皆様と大分遅れたので急いで山門を出る。近い距離だがバスで滝前まで下る。那智の滝は高さ一三三米日本一といわれるだけあって水豊かな大飛瀑である。滝をバックに写真をとってバスへ引き返した。宝物殿を見たり熊野古道を歩くことは時間がないのでまたの機会にするしかない。正式参拝などで予定以上に時間がかかり、十時過ぎ那智山を後にした。

新宮には熊野三山の一つの熊野速玉大社があるが、今回は詣る時間がないので素通りして熊野川沿いに北上し、熊野三山の中心である熊野本宮大社へ向かった。平安の昔から江戸時代にかけ蟻の熊野詣でといわれたように、天皇をはじめとし貴族から庶民まで大勢の人々が、田辺から山中の古道を辿って先ずここ本宮をめざしたものであった。本宮大社は明治二十二年まで近くの大斎原にあったが大洪水で流失したので、現在地に移されたそうである。杉木立の中の石段を登りつめ神門をくぐると、広々とした神苑の奥に三つの社殿が並んでいた。ここでは思い思いにお詣りをする。

十二時を過ぎていたが、昼食は上野地ということなので十津川に沿って北上を続けることにする。本宮を後にすると間もなく奈良県十津川村である。山また山、谷また谷の秘境の九十九折の狭い国道をハラハラしながら進む。台風による土砂崩れは案外見られずダムに流木が一杯漂っているのが散見された。午後二時過ぎやっと上野地に着いて遅い昼食をとった。食堂のすぐ横に日本一の吊橋といわれる谷瀬の大吊橋があった。長さ二九七米、

楽しいくらしのお手伝い
ホームセンター
アクロ
竜野店
竜野市竜野町富永
☎(0791 3-3226(代)
営業時間AM10:00～PM7:00
(定休日) 毎週水曜日
山崎店
宍粟郡山崎町今宿
☎(0790)62-2434(代)
営業時間AM9:00～PM7:00
(定休日) 毎週水曜日

川からの高さ五四米という。食後早速渡っている方もあった。思い思いのグループで記念写真をとったり、スリルを楽しんでおられた。いよいよ出発という時石田さんが食堂の入口で転倒して負傷されていることが分かった。垣口さんと長田さんが付添って五条の病院へ行って頂くことになった。申訳ないがケガ人を残して三時頃谷瀬の吊橋を後にして帰路についた。

十津川村から大塔村を通り五条市に着いたのは四時半頃であった。本宮から五条まで一一〇粁の行程は名実ともに紀伊半島の秘境であり、狭い道と深い谷間に驚き続けた。運転士さんも大変だったことと心から感謝する次第です。香芝インターに五時半頃着いてほっとした。高速道に乗ればもう安心だ。松原インター付近がいつものように少し渋滞したが後は快調に走った。予定より一時間遅れて八時半山崎へ帰着した。

一泊二日の南紀回りのコースは強行軍ではあったが、めったに行けない本宮大社や十津川渓谷に行けたことを喜んで下さる方も多かったと思っています。石田さんの不慮のケガはお気の毒でしたが、垣口さんの適切な処置で一日遅れて帰宅されたことを付記します。お世話になり有難うございました。

北川邸の梅（花香実）

堀口春夫

山崎町東鹿沢、文化学院の院長北川智恵子氏邸の庭先に梅の古木は樹齢およそ二百年余で、たいへん珍しい梅の品種である。

同樹は山崎藩四代目の藩主本多肥後守忠可侯の時代江戸下にあった梅を取木して山崎家中に移植し通称『江戸梅』と称し、広く武家屋敷の庭に移植されたが、長い間の風雪に耐えて今ではこれ一本しか残っていない。この梅は花も実も立派なもので、最近同家の令息で香川大学農学部教授北川博敏氏の知人で石川県立農業短大の教授で梅専門の権威者に鑑定依頼したところ、江戸初期、後水尾天皇が『花香実（はなかみ）』と名付けられた珍しい品種と

株式会社
安井書店
宍粟郡山崎町山崎90
TEL山崎㊷0700(代)

判明した。同屋敷は江戸時代の藩士浅井勇馬の屋敷跡であったが、もはや樹齢も尽きそうなのでなんとか取木してでも残したいと言われている。

近況ニュース

◎山崎藩主本多家の菩提寺、同町寺町青龍山大雲寺本堂は三百余年来の建物でしたが、昨年八月より建て替えがなされ、近く完成する。内廊下式で本堂内陣並びに位牌殿は格天井（ごうてんじょう）で彩色され、脇堂に藩主の位牌壇が設けられ、さすがに藩主菩提寺の面目を保たれている。今秋の十一月十日には落慶法要が催される予定です。

◎同町寺町にある泉龍寺墓地では無縁墓が収積整理をされ、祭壇を設け三月二十四日無縁法界霊の供養が営まれた。

◎ふるさとすごろくできる。町内の史跡や名勝をめぐるすごろくが昨年十二月に作成されました。山崎町教育委員会で一部五〇〇円で入手できます。裏面には町全図に史跡や名勝の箇所を示し簡単な説明があります。ふるさとめぐり資料としても活用できます。

◎三月十日本多記念館で平成三年度総会を開催しました。記念講演として赤松史学会会長の原弘平先生をお迎えして、「赤松氏の盛衰と山崎」の演題で、本年のＮＨＫテレビ『私本太平記』とも合わせながら興味深い講話を聴かせていただきました。

◎来る四月二十八日、赤松満祐が最期をとげた城山城（新宮町）の見学会が竜野市・新宮町・西播磨文化会館の共催で実施されます。

平成三年　四年度　役員

役職名	氏名	住所	電話
名誉会長	安井淳三		
顧問	小畑欽之助		
〃	庄和夫		
〃	壷阪壽		
〃	伊藤親保		
〃	前田連		
〃	福山清一		
会長	堀口春夫		
副会長	久保寅夫		
〃	志水美好		
総務部長	岸本正理		
会報部長	大谷司郎		
研修部長	志水美好		
史跡部長	久保寅夫		

役職名	氏名	住所	電話
事務局長			
山崎地区西支部長			
山崎地区東支部長			
城下地区支部長			
戸原地区支部長			
河東地区支部長			
神野地区支部長			
蔦沢地区支部長			
菅野地区支部長			
土万地区支部長			
監事			
〃			

平成三年　四年度　各部構成（支部長は全員総務部）

会報部長
大谷司郎

加藤昭彦
織金義雄
谷川道一
藤村清一
安井道夫
上木猛

研修部長
志水美好

野上久男
垣口正信
高野薫
福井久夫
三木敏夫
岸本正理
年綱東
横井時成
大上善示

史跡部長
久保寅夫

志水正信
伊野操治
深川春雄
福井益男
柳田弘
志水豊章

平成三年　四年度　地区別幹事

西町	庄能	須賀出石
門前	中広瀬	高所
加生	今宿	中
本町西	山田	神谷三谷
本町東	東鹿沢	岸田矢原野々上
元山崎	中鹿沢	三津田井
山田町	本鹿沢	五十波
福原町	西鹿沢	与位
北魚町	〃	宇野下町上下牧谷
寺町	千本屋御名	東下野
紺屋町	船野元	大谷中野
伊沢町	中井鶴木	上ノ上上ノ下
出水町	春安	木谷市場
富士野	段	青木塩田
鴻ノ町	金谷	高下
旭町	比地	大沢
大才町	川戸	塩山
上寺	宇原	
横須	下宇原	

事務局だより

一、春の研修旅行案内を会報に挿入しています。参加ご希望の方は早目にお申し込み下さい。

二、会報No.77配布と同時に本年度会費一、〇〇〇円を地区幹事さんで集金して頂くようお願いします。

（山崎郷土研究会事務局）

山崎町出水町　柳田　弘宅

TEL　六二一七六八二番